

百姓入門記

小松恒夫



最新刊

朝日新聞の
ポケット文化

病後のリハビリに百姓をはじめた編集者が、自然と人間から学んだ感動の体験記

朝日文庫



百姓入門記

朝日文庫

1988年3月20日 第1刷発行

定価480円

著 者 小松 恒 夫

発 行 者 八 尋 舜 右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© TSUNEO KOMATSU 1988 Printed in Japan

ISBN4-02-260482-4

百姓入門記

小松恒夫

朝日文庫

表紙・扉 伊藤 鑛治

はしがき

雪国の農民が、昔、山の雪形を見て春耕の日取りを定めたように、私は武蔵野の「花ごよみ」に畑仕事を促される。

早春。オオイヌノフグリの鮮やかな瑠璃色が畦道でつぶやく。「ジャガイモの芽が動くころだよ。堆肥の用意はいいのかな」

盛夏。トロロアオイの豪華な淡黄と臙脂が土堤から呼ぶ。「暑いからってなまけてはだめ。ハクサイの地作りはできたの」

初冬。枯れ蔓から垂れたカラスウリの赤が叫ぶ。「霜がもうすぐですよ。早くアカメイモのズイキをとってやらなくちゃ」

疲れが過ぎて病んだおかげで、初めて身にしみて自然を見る眼が開けた。いつしか野草の声を聞く耳もできたのか。そんな輪廻を重ねること八年。土と人間とのかかわりについて、すこしは思いが深まってきたように思う。百五十坪の畑作百姓に入門した記録である。

目次

はしがき 3

一章 武蔵野の復讐

新居が浴びた土埃の洗礼 11

猛毒虫アオバアリガタハネカクシ 17

緑を育てたことがない庭の土 25

貧乏人には貧乏人の方法があった 31

二章 レンゲソウとワラの歌

米はあってもワラはないことの意味 37

“地主の農法”の道はけわしい 45

ようやく確保した一年分の米 51

三章 雪国の村に見たマチの引力

いろいろの灰文字は明快だが重い 58

「愛郷心も食えなくなればそれまでだ」 64

越後からかつて帰った鍬と鉋 71

四章 ラッパを捨てて握る鍬

すぐ目の前に「ムラ」があった 77

百五十坪の「小作人」となる 82

冬の天地返しで回復した体力 87

五章 群像・畑の恩師たち

「きみ、それでジャガイモができるかね」 94

「百姓も、土への愛情がものをいうです」 99

「栽培はりモコンながらご指導いたす」 105

第六章 ヒタシマメ戦争一件落着

野菜作りにもある「西医」と「中医」

梢から見下ろすキジバト夫婦

114

せつかくの新案も種苗商に奪われた

119

110

第七章 雑草に注ぐ憎しみと愛

夕日に長い雑草の影

126

雑草にもファッションがある

133

雑草なみに強い作物の生命力

136

第八章 カンピョウ製造顛末記

塩加減は「初霜の降りた程度」

145

広いから作れるウリ科地這い作物

148

機械ができれば捨てられる道具

154

第九章 舶来野菜紳士録

逆間引きレタスの美味は大好評 161

イタリアのパジリコは日本のシソそっくりか 163

「八百屋にないものもたくさんございます」 168

十章 シマヘビと埋蔵文化財の共存

ヘビに選ばれた健康な土 177

金粉つきの瓦硯と釜飯のふた 182

耕さぬ奥さま族と諸先生の農業無視 187

天平の遺物、昭和の遺物 191

十一章 土に学ぶ子らとの出会い

祭りで見かけた子どもたちの衰弱 197

盗まれず碎かれるだけのスイカ畑 202

ヒマワリは水色の汗を流す 207

小学二年生が七キロの米を穫った 213

十二章 ヒマワリとナガイモの神秘

それでもヒマワリはまわる 219

豊作祈念祭に舞いこんだ金一封 226

ナガイモのつるがピクピク動いた 231

未完の童話『ながいもの日記』 238

あとがき 248

文庫版あとがき 251

実践をふまえた文明批評の書（俵萌子） 256

百姓入門記

一章 武蔵野の復讐

新居が浴びた土埃の洗礼

畑作地帯の土を、私はこれほど憎んだことはなかった。その理由は、引越しの日に吹き荒れた強烈な春一番である。

東京といっても多摩地区にある小さな町の小さな借家から、武蔵野を見おろす丘の一角に建てた新居への引越し。その荷物のなかには、借家の庭に仮植えしておいた高さ一メートルほどのドイツトウヒがあった。前年のクリスマスに、街の花屋の店頭で、「モミ」だとだまされて買ったものである。引越しのために掘り上げたら、地表から五、六センチ下まで、土は焼きたてのワラ灰のようにフカフカであった。この冬、関東の野山に雨も雪もほとんどなく、土は乾ききっていた。

共稼ぎ夫婦が、忙しい日程をやりくりして引越しと定めた二月二十日、日本海を強い低気圧が東進した。春の気配とともに勢力を増した南海の高気圧が、これに一斉攻撃をかけた。朝のうち、まだ地表に夜露が残っている間は風は空気だけであったが、昼近くになるとそれ

は砂嵐に変わった。乾ききった表土は、捲き上げられ吹きとばされ、隙間だらけの古借家に、至るところから侵入してきた。引越し荷物は、たちまち褐色のペールをかぶり、手伝いの人たちの分も含めて、あわてて買ってきたガーゼのマスクは、五分とたたぬうちに、鼻孔のところだけまっ黒な二つの丸がならんだ。

晴天というのに、午後のトラック出発時刻には、あたりは薄暗かった。中天まで吹き上げられた砂塵が濃霧のように太陽を隠してしまったのだ。ようやく荷を積み終えたトラックは、ヘッドライトをつけ、新居に向かってのろろと出発した。町なみをぬけ、野中の道に出ると、視界はさらに暗くなった。初老の運転手は、対向車との事故を避けるため、たえずクラクションを鳴らしつづけた。

「兵隊でね、北支に五年いたがね。黄塵万丈というのはウソじゃなかったな。今日は、まったく黄塵なみだよ」

運転手は助手台の私に語りかけた。目に入った土埃のため、涙を流しつづけていた私は答えた。

「中国は知らないけれど、黄砂は家のなかにも入ってくるんでしょね」

私の頭の中は、今夜から住む新居がどうなっているかでいっぱいだった。その前日、一歳半の幼女まで動員して、床も階段も窓ガラスも、ピカピカに磨き上げておいたのに――。しかし運転手の話は無情だった。

「入ってくるなんてもんじゃねえな。まるで砂の洪水だね。あとで、銃の手入れがたいへんだったな」

私は黙って、相変わらず涙を拭いながら見えない前方を見守るほかなかった。それから五年後の早春、私は中国を訪れたのだが、この時は幸か不幸か黄塵には遭わなかった。したがって私はこの日以上の砂嵐をまだ経験したことがない。その未曾有の土埃のなかを、トラックは這うように走りつづけ、ふだんなら三十分ほどの行程を、二時間近くかかってようやく新居にたどりついた。

予想したとおり、新居はすべて土に覆われていた。庶民住宅用の軽金属サッシュなど、まだまったく普及していない時代のことであった。棟梁は腕自慢の宮大工で、乏しい予算の割には凝った材料でいいねいに建てたはずであったが、建具とそのまわりとの間には、日本建築特有の、通気のよきを生かす隙間が随所にあった。その隙間から侵入した乾いた土の微粒子は、昨日磨き上げたばかりの床にも階段にも新雪のように積もり、畳も歩けばくつきりと足跡がついた。曇りひとつなく磨いたはずの窓ガラスから、外はほとんど何も見えず、ガラス戸の棧には吹雪のあとの雪のように、二センチほどの高さに土がたまっていた。新居での私たち家族の生活は、まずその夜、ふとんを敷く平面だけを拭き清めることから始めるほかなかった。

夜半に風はピタリとやんだ。気圧配置は翌日から冬型にもどった。冷たい井戸水を汲んで、

家を拭きつづける日がつづく。そうしないことには家具ひとつ定位置に置くことさえできなかった。雨は相変わらず降らなかった。一週間かかってほぼ清掃を終えたとき、こんどは春二番が襲ってきた。すべてが徒労に帰してまたやり直し。電気掃除機もない時代、私たちはただひたすらに雑巾で拭き、土をこすり取る毎日をつづけた。

拭けば拭くほど、こすればこするほど、家具にも床にも、サンドペーパーをかけたように無数の条痕ができた。ほとんどを借金で建てた待望の新居は、私たちがまだ住みなじまないうちに、こうしてたちまち傷だらけとなった。彼岸過ぎごろ、かなりの春雨が降るまで、家の中での土との格闘は終わらなかった。

狭いながらも喜びをもって住むべき新居を、ここまでいためつけた敵陣の所在はどこか。二階のベランダから眺めわたすと、それは足もとからすぐに一面に広がっていた。古多摩川の段丘崖を階段状に宅地造成したこの分譲地を買ったのは、それより四年前の冬の日であった。風のない春のような暖冬の昼。南斜面の陽当たりのよさと、万葉時代「多摩の横山」と詠まれた多摩丘陵まで一望に見渡せる眺めのよさに魅せられて、即日契約したのは何という早計だったか。

眺めがいいとうれしがった眼下の武蔵野の畑作地帯は、あらためて見ると、段丘の下から南方に約二キロ離れた小市街地まで一面にひろがっていた。そのほとんどが野菜畑であることを、四年間にしばしばここを訪れた私は知っていた。しかし早春の畑は、まだ冬眠をつづ

けていた。わずかに見える株播きの麦畑を除けば、緑はどこにもなく、黒褐色の裸地は、こことく次の南風でわが家を襲う土粒の大軍団であった。

畑の土は、雑木林を切りはらい、崖を削って侵入してきたマイホーム族の人間に、容赦のない復讐を挑んできたのか。それに対抗するには、新来の人間の側はあまりにも無力だった。風が吹けば家を拭く。拭くごとにふえる傷。人間はその傷をながめて畑地の土を呪うほかなかった。自然の執念の底知れぬ深さに気づいたわけではないが、裸地への憎しみのあまり私たちはあたりを散歩する気にさえななかった。新居に移っても、地域は、私にとって環境とはなっていないかった。なり得るはずもなかった。畑地憎さという理由のほかにもうひとつ、旧居と同様、新居もまた私にとってはねぐらにしかすぎなかったからである。

◇

都心の勤め先まで一時間余という通勤距離は、当時としてはかなり遠い方であった。しかし国電内での五十分は、ことに出勤の際、私にとっては前夜の睡眠不足を補う貴重な時間となっていた。硬派の週刊誌記者という職業のため、取材や原稿書きの深夜労働が絶え間なかった。朝は重い頭で駅まで十五分の道をトボトボ歩き、電車が来て空席を見つければすぐにすわって、次の駅までにはもう眠りこける。そんな都市型生活者にとって、自宅とは、物の面ではどんな環境にかこまれようと、心の面ではその環境から隔絶した、ただひとつの点にすぎなかった。